



グローバルワークキャンプ in ASO

私たちの4日間の軌跡



開催期間：2013年（平成25年）8月20日（火）-23日（金）
実施会場：国立阿蘇青少年交流の家
主催団体：一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

文部科学省スポーツ・青少年局「平成25年度青少年教育施設を活用した国際交流事業」委託事業

もくじ

はじめに、事業概略	1~2
スケジュール	1~2
写真で振り返る4日間	3~4
基調講演	5
ワークショップ1	6
キャンプファイヤー	6
ワークショップ2	7
シャッフル分科会	8
そば打ち体験	8
民族衣ショー!	9
全体報告会	9
大観望ジオパーク見学	9
第1分科会:「観光」	10
第2分科会:「フェアトレード」	10
第3分科会:「食」	11
第4分科会:「伝統継承」	11
第5分科会:「国際理解」	12
講師陣からの講評	12
実行委員会より	13
実行委員募集について	13
アンケート集計結果	14

はじめに

近年、私たちの生活は、情報通信や運輸技術の革新などのグローバル化の進展によって便利になってきましたが、世界的な経済の停滞や高齢化によって不安定な状況にあります。また、途上国では、紛争や貧困問題の深刻化で苦しんでいる人たちが多くいます。これらの不安や問題を解決し、地球上の誰もが自分らしく生きていけるために、各国間の友好外交関係はもとより、国境を越えた人と人との交流、協働関係を築いていかなければなりません。多言語コミュニケーション力、そして、異文化を理解、受け入れることができるグローバル人材が求められています。さらに、真の「グローバル人材」には、より良い社会を創造するための行動力が求められます。当熊本市国際交流振興事業団では、今、求められる真の「グローバル人材」の育成を図り、豊かな日本の未来像を描き、世界との共生社会を構築することを目的に、「グローバルワークキャンプ」を企画しました。

開催にあたりましては、準備の段階から当日の運営まで多くの関係団体の皆様にご協力、ご支援いただきましたこと、また、本キャンプをご支援いただきました文部科学省に本稿をお借りして御礼申し上げます。

スケジュール

8月20日(火) 初日

10:00 熊本市国際交流会館 出発

11:30 国立阿蘇青少年交流の家 到着

入所オリエンテーション

※11:30-15:00

留学生・外国人大学生プログラム

そば打ち体験(久木野そば道場)

12:00 昼食

13:00 開会式・開会宣言

基調講演

15:00 ワorkshop1 (アイスブレイク)

17:30 タベの集い

17:45 夕食、入浴

19:00 キャンプファイヤー

22:30 就寝

事業概略

【目的】グローバル社会における人と人をつなぐ国際交流と若い世代の人材育成。

グローバル化、新興国（特にアジア）の成長等、世界全体の社会構造が大きく変化する中で、アジアを中心に未来を担う若い世代が集い、交流を図りながら、共生社会を構築するための自己の存在認識と可能性を発見する。

【期間】2013年（平成25年）8月20日（火）－23日（金）3泊4日

【会場】国立阿蘇青少年交流の家（熊本県阿蘇市一の宮宮地6029-1）

【参加者】84名

内訳：日本人大学生42名、留学生（日本在住）12名、海外の大学生30名

国籍別：12の国と地域（インド1名、インドネシア共和国2名、ウズベキスタン共和国1名、スリランカ民主社会主義共和国1名、大韓民国17名、中華人民共和国4名、ナイジェリア連邦共和国1名、バングラデシュ人民共和国1名、ベトナム社会主義共和国1名、ラオス人民民主共和国10名、台湾3名）

【主催】一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

【企画委員会構成員】

橋村 隆介氏	崇城大学准教授
須藤 美代氏	熊本県文化課
樋口 久美子氏	日本国際交流協会九州支部長
大野 章子氏	JICA デスク熊本
平部 至織氏	独立行政法人国立青少年教育振興機構
金 賢廷氏	韓日社会文化フォーラム代表（以上6名 順不同）



8月21日（水）2日目

6:00 起床、清掃
6:45 朝の集い
7:00 朝食
9:00 分科会活動（1）
17:30 タベの集い
17:45 夕食、入浴
19:00 ワークショップ2
（学生活動見本市）
22:30 就寝

8月22日（木）3日目

6:00 起床、清掃
6:45 朝の集い
7:00 民族衣ショー！
7:30 朝食
9:00 分科会活動（2）
17:30 タベの集い
17:45 夕食、入浴
19:00 シャッフル分科会
22:30 就寝

8月23日（金）最終日

6:00 起床、清掃
6:45 朝の集い
7:00 朝食
9:00 全体報告会
11:00 閉会式
12:00 国立阿蘇青少年交流の家出発
13:00 昼食（大観峰）
14:00 ジオパーク（大観峰）見学
15:00 ジオパーク（大観峰）出発
16:30 熊本市国際交流会館到着・解散



写真で振り返る4日間





開会式、開会宣言、基調講演 講師：興梠 寛氏（昭和女子大コミュニティサービスラーニングセンター長）

国立阿蘇青少年交流の家にて、記念すべき「第1回グローバルワークキャンプ in 阿蘇」が開催されました。（開会式は日本人学生と大分県別府市の立命館アジア太平洋大学の留学生の参加で始まり、熊本市国際交流会館から参加の留学生と海外大学生は久木野そば道場でのそば打ち体験後、ワークショップ1（アイスブレイク）からの参加となりました。）

実行委員長の内尾晶子さんが「4日間を、多くの出会い、交流をとおして楽しく、有意義に過ごしましょう！」と開会宣言を行い、各学生の自分探しの旅が始まりました。実行委員メンバーの照会はそれぞれの好きなことをスライドで紹介しました。



開会式後、昭和女子大学コミュニティサービスラーニングセンター長の興梠寛氏に、参加者の皆さんに本ワークキャンプを有意義に過ごしてもらえようとお話いただきました。2名の参加者に報告してもらいます。

ボランティアは人生の道標

岩木陽平さん（鳥取大学1年）

興梠先生が昭和女子大学の学生たちと被災地支援を訪れ、「読み聞かせ」活動をしたら、子供たちにボランティア精神が芽生え、逆に読み聞かせをしてくれた。というお話は特に印象に残りました。「ボランティア精神はうつる」は、「私は何故ボランティアをしているのか？」という疑問への答えとなりました。

講演の後半では、「私と世界に変化を起こそう」がテーマでした。スライドに写し出された次のメッセージは、ボランティアは、単なる奉仕活動ではなく、多くの人たちとの“つながり”を通し、社会のために行う活動であることを気付かせてくれました。



「誰かの喜びと悲しみ、希望と絶望、夢と現実を受け止めて、リアルな自分の姿が見えてくる。それがきみの未来、きみの姿だ！」

これから大学生活を送る上で、将来についておそらく悩むでしょう。そんな時、きっとボランティア活動は私の道標になってくれることと思います。

自分の中にあるもの

小原麻衣さん（神戸大学2年）

この講演から、私は残りの大学生活を歩むうえでのヒントを見つけました。それは「自分の中にあるものを最大限に活用して、社会のために生きる」という言葉です。世の中には、国内外問わず、様々な社会問題が散在しています。これまで私は、社会に貢献したいという漠然とした想いをもちながら、やりたい活動は何なのか分からずにいました。講演の中に出てきた「自分の中にあるもの」、「強みが発揮できるフィールドで生きる」という観点は私になかった発想です。まだ、答えが見つかったわけではありませんが、あと2年間の大学生活の中で、自分の武器（強み）を磨きつつ、社会を見つめて何が出来るか考えていきたいと思っています。



日本を含む12の国と地域から総勢84名の参加者が集まった今回のワークキャンプでは、「初日にどれだけ打ち解けた空間を作れるか」という雰囲気作りが重要だと考え、アイスブレイクを行いました。

『Hop (導入)・Step (練習)・Jump (応用)』という3段階の内容を設定し、最後のJump (応用)で、クライマックスのキャンプファイヤーに向かって盛り上がっていくように準備しました。

講師に、独立行政法人国立青少年教育振興機構の北見靖直氏を迎え、先ず、Hop (導入)で、全員参加型のジャンケン列車や人間知恵の輪など体を動かし、楽しいアイスブレイクを行いました。講師の誘導は素晴らしく、直ぐに参加者全員がリラックスでき、心底打ち解けました。

参加者の緊張がほぐれたところで、次の「Step (練習)」に移りました。内容は、分科会ごとに分かれ、ダンスの振り付けを考え練習するというチームワークが必要となるワークです。夜に予定しているJump (応用)で行うキャンプファイヤーのダンスの練習も兼ねていたため、参加者同士がさらに親睦を深めるとともに、分科会ごとのチーム意識の向上や、ダンスを通じた言葉に頼らない自己表現や相互理解を深めてもらう狙いがありました。しかし、ダンスの振り付けを考えるというのは、意外と難しく、こちら側の意図がうまく伝わらず、戸惑ってしまった参加者も多く、思ったほど活発なコミュニケーションには至りませんでした。ですが、まずまずの成果を上げたと思います。



初めて開催したキャンプにして、これほどのアイスブレイクができたことは、最初の講師の北見氏によるアイスブレイクで参加者の様々な壁が取り除かれ、参加者全員の力がまとまったからだと思います。来年は、今回の体験をもとに、もっと誰もが簡単に楽しめる工夫を盛り込みたいと思います！

キャンプファイヤー

報告：櫻田 聖人さん (日本文理大学 2年)

偶然！必然！に集まった仲間たちと協力し、楽しい思い出を作るとともに、友情と親睦を深めることを目標に、アイスブレイクの集大成として、クライマックスのキャンプファイヤーを行いました。中央に組み立てられた木材に点火する時、本物さながらの衣装に身を包んだ“火の神”がサプライズで登場し、点火したので、参加者たちは大変驚くとともに、ボルテージも最高潮に達しました。火はみるみるうちに木材を覆い、勢いよく燃え上がった所で、予め練習した「マイムマイム」や分科会毎に考えた「創作ダンス」を踊りました。他にも、留学生たちや海外からの参加者たちが、自分たちの国の民族舞踊を踊ってくれました。即興でありながら、周りの参加者を巻き込んでの一体感はすごく盛り上がり、たくさんの人たちの笑顔を見ることができました。たとえ言葉が通じなくても、こんなにも人は、踊りや歌で友情を深めることができるものだと感じました。最後に、満天の星空の下でブルーハーツの「青空」を合唱したことは参加者たちにも、この夏の思い出の1ページとして、心の中に刻まれたのではないのでしょうか。



サプライズ！火の神の登場



炎を囲んでみんなでダンス

目的は、実際にボランティア活動を行っている大学生たちが、今の社会にどのような疑問を感じて活動を行っているのかを知ること、また活動をしていない参加者が、自分にできることは何かを考えてもらうことでした。また、本キャンプ終了後に、何か始めたいと思った参加者と、活動をもっと広げたいと考えている団体との架け橋になる機会になればと思い企画しました。

「すごい！」活動をしている全国の10の学生団体*がブースを持ち、参加学生が自由に各ブースを周りながら話し合う「学生活動見本市」を開催しました。実際に参加者はそれぞれ自分の興味・関心を持ったブースに行き、熱心に話を聞いていました。

ブースによっては話が盛り上がり、その場でその団体の会員になる人も見受けられ、また、学生団体間の交流もあり、互いに刺激を受け合い、情報交換も出来たようです。

一方で、途中で部屋を退出し、ロビーで雑談する人たちがいました。反省点として、来年は、今回以上に興味を持ってもらえるように団体ブースを増やしたり、楽しくなるような仕掛けを行いたいと思いました。是非、来年も参加してください★



*出展協力団体(順不同)

★ほっとけない熊本プロジェクト：熊本県立大学

世界の貧困問題や地球温暖化の現状を知ってもらうための啓発活動を行っているボランティア団体

★C3.：熊本大学

熊本大学にきている留学生の生活サポートや熊大生と留学生の交流の場を設け、留学生との交流を主に行っている。

★「Book to Read」プロジェクト：九州国際大学

カンボジアへ本を贈ろうと始まった「Book to Read」プロジェクト。地域の人々と一緒に本を集める活動や、カンボジア留学生との交流、翻訳の依頼、資金集めや広報等を行っている。

★wiri/UNICA：九州大学

九州海外協力協会(NPO法人)にインターンシップした学生のコミュニティーサークル。国際協力についての勉強会などを行っている。また、JICA九州に各国から派遣されている研修員と交流会を開いている。

★HABITAT APU：立命館アジア太平洋大学

『「家」づくりを軸とした活動を通じて、「家」を持つ幸せをより多くの人に伝え、全ての人が可能性を見いだせるコミュニティを創造する。』という理念のもとに活動している。

★あゆみ PROJECT：日本文理大学

大学生が遠隔地からできる被災地支援を考え実行している。

★フェアトレードグループ「BOROO」：鹿児島大学

鹿児島市でフェアトレードを広め、世界を知るきっかけづくりの活動をしている

★FTSN九州：熊本県立大学

学生を中心として、フェアトレードを知りたい、広めたいという人たちのネットワークで、毎月1回のオンラインミーティングと年1回の合宿を行っている。

★NPO アイセックジャパン神戸大学委員会：神戸大学

アイセックジャパンは113の国と地域で活動する世界最大級の学生組織 AIESEC の日本支部として、海外インターンシップ事業を運営する学生団体。当委員会は現在25大学に支部のあるアイセックジャパンのうち、神戸大学を拠点とした委員会。

★国際学生シンポジウム：筑波大学

毎年末に、全国の学生や社会人総勢200人が参加するディスカッションイベント。“Our vision:よりよい未来への、可能性の追求”“Our mission:世界の諸問題を解決する契機となる「最高の議論の場」の提供”を活動理念とし、ディスカッションを通じて様々な社会問題に多様な視点から向き合っている。

3日目の夜に行ったシャッフル分科会は、それまで分科会ごとで活動していた参加者同士を文字通りシャッフルして、分科会の垣根を越えた交流と意見交換を行いました。

シャッフルされた参加者たちが、違う分科会の参加者と別テーマの議論が出来たことは、新たな知的発見と、出会いをもたらすことが出来ました。その中で、最も印象に残ったケースが、第5分科会が行った「国際結婚」のテーマでした。異なる価値観を持つ各国からの参加者たちの意見によって、単なる恋愛話や国際結婚だけの話に留まらず、異文化理解、共生に関する意見も出されるなど活発な議論が行われ有意義な時間を過ごすことができたと思います。

他の分科会でも同様に、今まで話したことがなかった参加者同士の積極的な交流や様々な価値観を持つ人々との交流が図られました。



そば打ち体験（久木野そば道場）報告：パク・ヨンベさん、イ・ドンギョさん（韓国永進専門大学）

そばを自分で作って食べることは、初めての経験でしたので、とてもわくわくしました。最初に、そば粉に水を入れて手でこねましたが、生地がモチモチしていて、とても気持ちよかったです。その後は、こねた生地を麺棒で伸ばしました。まんべんなく伸ばさないと駄目なので難しかったです。

でも、参加者みんなすごく楽しそうでした。もちろん、私も楽しかったです。一生懸命伸ばした生地をついに細く切る時がきました。私は過去に一人で料理をした時、指を切った経験があって怖かったです。そば道場の女性スタッフが本当に優しく教えてくれたので、全部細く切ることが出来ました。後は食べるだけです。

自分で捏ねて、細く切った生地が、そばになって出てくるまでの時間がとても長く感じました。ついに出てきたそばをすぐに食べましたが、期待したほど美味しくなかったです。不味かったわけではなく、思っていたより美味しくなかったということです。でも、最初から最後まで工程を全部自分で作った経験は、一生記憶に残る大事な経験です。



（パク・ヨンベさん）

参加した初日に、そば作りを体験して食べられると聞き、期待していました。そば道場に着いたとき、そこから阿蘇山の素晴らしい風景を見ることができたのは良かったです。そば作りは初めてだったので、生地にする所からうまく出来なかったけど、面白かったです。そして、何よりも麺を切ることが難しく、太さを一定にすることが出来ませんでした。出来上がった麺は、温かいそばか、冷たいそばで調理してもらうことが出来たので、私は冷たいそばにしてつゆにつけて食べました。麺の形は可愛くありませんでしたが、味はおいしかったです。同じチームには日本人や中国人、同じ韓国人もいましたが、そばを作りながら、親しくなることができて良かったです。初めての経験でうまく作ることが出来ませんでした。全て自分が作って食べられるということが、不思議な感覚で楽しかったし、嬉しかったです。



（イ・ドンギョさん）

民族衣ショー！

報告：宮原 薫さん（熊本学園大学 2年）

3日目の朝、ラオスとインド、スリランカからの参加者たちが、自分たちが持ってきた民族衣装をみんなに披露したいという要請を受け、急きょ“民族衣ショー！”を行いました。

それぞれの民族衣装や民族ダンスの披露、ラオス語の“ありがとう（コーブン・チャイ）”の挨拶を教わり、また、日本人からも大分出身の参加者が、地元の踊りを披露してくれて、大いに盛り上がりました。それぞれの衣装の意味や、どんな時に着る衣装なのか、振付、挨拶などお互いの文化に触れる良い機会になりました。3日目ということもあり、すっかり打ち解けた私たちは、みんなでダンスを楽しみ、最後にはラオス語で“コーブン・チャイ・ライライ！”（本当にありがとう）とみんなで声を掛け合いました。この企画は、母国を知ってもらいたいという外国人学生・留学生の想いと実行委員の機転、そして参加者・オブザーバーの皆さんの協力によってスムーズに進行することができました。コーブン・チャイ・ライライ！



全体報告会

報告：大和 賢佑さん（熊本大学 2年）

この4日間の集大成として、回遊型ポスターセッション方式で報告会を実施しました。分科会内で参加者が5つのグループに分かれ、他の分科会の参加者と一緒になり、新たな5つのグループが各分科会のポスターパネル前に配置されます。分科会活動と活動から考えられた斬新な企画が発表されました。質疑応答があり、次のポスターパネル前に移動します。移動してすべての分科会の報告がなされる中、自分の分科会に来た時、参加者それぞれに発表する役割が割り当てられます。言語や文化が異なる参加者が出会い、活動を通してアイデアや意見を出し合い、話し合った結果を分科会のみんなの代表として、



日本語、時には英語で発表しました。聞く側も参加者同士が言語・文化の通訳を行い、助け合いながら進められました。4日間という短い期間でしたが、異文化の中で戸惑い、どうやって自分の思い、考えを相手に伝え、理解してもらうのか、また、どうやって相手の思い、考えを理解すればいいのか、お互いに真剣に考え、わかってもらえた時の喜びは充実感を覚え、本当の意味でのコミュニケーション力を身につけられたのではないかと思います。それぞれが大きな成長を成し遂げたことと思います。

すべての分科会で「出会いを楽しむ」、「自分たち大学生に今、できること」というテーマへの活動がしっかりできていたこと、充実した4日間を過ごせたことを、みんなの満面の笑みから感じることができ、安堵するとともに、本当に貴重な時間を素晴らしい仲間とともに過ごせたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

大観峰ジオパーク見学

報告：松野 依里子さん（尚絅大学 2年）

最終日の午後、私たちは4日間のプログラムの最後を締めくくるジオパーク（大観峰）を見学しました。大観峰では、阿蘇のカルデラの誕生やその後の経過、歴史などについて、阿蘇ジオパーク推進協議会のスタッフの方々からお話を聞かせていただきました。当初はこの大観峰から見下ろす雄大なカルデラを眺めながら説明を聞く予定でしたが、当日はあいにく雨。バスの中で説明を聞くこととなりました。

参加者の中には、「そもそもカルデラって何？」という疑問を抱いている人が多かったようですが、そのことについても絵を使って分かりやすくお話をしてくれました。

この阿蘇のカルデラは、世界でも指折りの雄大さを持つとともに、その中に約5万人の人々が住んでいるということは、とても珍しいことだそうです。また、阿蘇では、過去に4回の大規模な噴火があり、その時、地中から大量のマグマが噴出したことで、その部分が空洞となり、その一帯の地表が陥没して現在のようなカルデラが形成されました。また、カルデラが出来た当初は水が溜まり「カルデラ湖」だったものが、外輪山の一部が崩れ、中の水が流れ出たので、今のこの地形となれたそうです。さらに、このカルデラを含む、阿蘇の地層や地形から、熊本の美味しい水は育まれるとも聞きました。



噴火という自然の大きな力によって、現在の阿蘇が造られたことに不思議な気持ちになるとともに、水が美味しいからこそお米や野菜も美味しくなるという自然の仕組みの大切さを改めて考えさせられました。

第1分科会：観光

櫻田 聖人さん（日本文理大学2年）

本分科会を設けた動機は、各地には優れた観光資源がある中、地元の人々がそれを有効に活かしきれない箇所が多くあると感じたからです。そこで、今回の会場が有名な観光地の阿蘇でもあることから、実際にその観光スポットを訪問することで、自分たちだからこそ出来る観光地のPRや、地域おこしを考えました。

2日目の朝、私たちの分科会は、観光ガイドの案内で阿蘇ジオパークの一角でもある、俵山展望所から中岳火口、鍋ヶ滝、遊水峡、最後に黒川温泉を視察しました。当日はとても暑く、途中雨にも見舞われましたが、中岳火口をはじめ、美しい阿蘇の外輪山から望むカルデラや人々が作りだした景色を参加者は思い切り楽しんでいました。視察を終え、宿泊所に戻ってから4つの班に分かれて、振り返りを行いました。各所で感じたこと、発見したことを話し合い、様々な意見が出ました。

翌3日目の午前中は、阿蘇ジオパーク推進協議会のスタッフの方から、ジオパークの設立に至った経緯や阿蘇の観光資源の成り立ちについて詳しく話を聞きました。午後からは、昨日の活動や、午前中に聞いた話を元に、ワークショップ「もし自分が観光大使になったら」を行いました。各班からは、「くまモンの阿蘇バージョンを作成してPRする」「ウォーキング、サイクリング、ツーリングとテーマ別で楽しめるルートを作る」等それぞれ独自でユニークなアイデアが出たため、協議会スタッフの方も感心されていました。

世界がグローバル化する中、簡単に海外へ行けるようになっていきます。観光資源は、たくさんの人の楽しみや癒しになります。参加者が自分の地域に帰っていった時、それぞれ地元にある観光資源を大切に考え、PRなどの行動に移してもらえたら嬉しいです。



第2分科会：フェアトレード

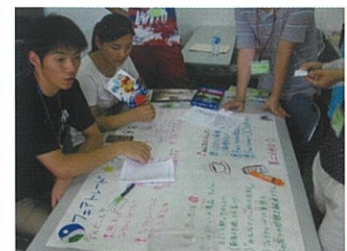
野口 一馬さん（熊本県立大学3年）

本分科会は、世界の垣根を越えてフェアトレードについて学び、様々な意見を見出して、より深くフェアトレードについて学んでもらうというコンセプトから始めました。

分科会初日は、フェアトレードについて考えてもらうために「貿易ゲーム」という世界経済の仕組みを疑似的に学ぶゲームを行い、生産者側である途上国側と、それを商品化して販売する先進国側とのメリットとデメリットについて考えてもらいました。その後、熊本で長年フェアトレード活動を展開されている「フェアトレードシビックまもと推進委員会」の明石祥子氏と、新潟大学大学院でフェアトレード研究をしている佐藤孝輔氏を講師に招き、それぞれのフェアトレード活動への思いや取り組み、その活動の意義などについて、詳しく話を聞きました。

翌日、フェアトレードのコーヒーを出してくれる阿蘇のカフェを訪問し、映画「バレンタイン一揆」を鑑賞しました。これは東京でフェアトレード理念の普及や、生産者の事をもっと知ってもらいたいと頑張っている女子学生3名の実話をもとにした映画で、同じ大学生が、「バレンタインの時にチョコレートを配る」といった普段の自分たちの行動を見直し、考え、そして行動に移し、周りのみんなにも影響を与えていく、という内容は、今後の私たちに、とても学びの多いものになりました。

最終日の全体報告会では、この分科会で学んできたことを参加者自身の力と知恵、そして私たちスタッフが丸となって、フェアトレードの魅力と大切さを参加者たちに伝えられたと思います。また、フェアトレードを通して自国の価値観を比較し、お互いのことを理解することが出来たことは、この活動の大きな成果だと思っています。



本分科会は、私たちが普段食べている「食」について、阿蘇の自然の中で食べ物の作り方、原料や材料、生産者の想いなど様々な観点から、もう一度、考えてもらいたいという思いで設けました。

最初に、参加者それぞれがどんな食生活を送っているのか、偏った食生活になっていないか、好きな食べ物は何か、などについて話し合いをしました。参加者の出身国の食文化の事情や文化の違いに興味があき、理解を深めることが出来ました。

次にワークショップ形式を取り、食品添加物や栄養サプリメントなど、普段何気なく摂取している食品のもつ危険性について学びました。その後、阿蘇で有機栽培のお米を作っている阿蘇デザインファームの山本剛宏氏から、農業に対しての思いや苦労、裏話についてお話を聞く事が出来ました。

この話から、自分の身を守るためには、その食材がどのような方法で生産されたかなどの情報を集め、選んで買うことが重要だと学びました。

翌日、山本氏が関係している水田を見学し、安全な野菜や穀物などを作るためには、その土壌作りも重要であることを学びました。その後、そこで採れた有機野菜とお米を使った無添加で安全なカレーを作りました。便利な調味料や、インスタント食材を使わずにカレーを作るには時間がかかりましたが、お米や野菜の味がしっかり分かる、美味しいカレーを作ることが出来たことは大変うれしかったです。私たち大学生の食生活は、便利さと安さを求めがちですが、この2日間の活動を通して、安全な食べ物を見極め選ぶことは、健康的に生きるために欠かせないものであることを再確認出来ました。

全体報告会でも2日間で学んだことを報告し、一人でも多くの参加者たちが、安全に生産された食材を選ぶことを普段の食生活に活かしてもらい、一人でも多くの人に伝えて欲しいと思います。



本分科会は、昨今、日本で伝統文化が失われつつあるのは「その伝統文化そのものに接する機会が少なく、面白さが伝わりにくいからではないか」という考えから、清和村に伝わる清和文楽を通して、その継承されていく上での問題点、及び解決策を探りたいと思い設けました。

初日の午前中は、各国の伝統文化の状況を知るために、インドとラオスの参加者からそれぞれの踊りを披露していただきました。そして、参加者一人一人から「あなたにとって伝統とは」をテーマに、芸能分野に限らず、文化や伝統と聞いて感じることを語ってもらいました。「伝統は偉大なものだ」、「その国のアイデンティティである」といったポジティブな意見と、「非現実的なもの」といったネガティブな意見が出されました。

午後には、清和文楽館の渡辺久館長と、清和文楽保存会の倉岡輝治会長のお二人をお招きして、清和文楽の生い立ちや歴史、その継承の取り組みなどをお話していただきました。

そして実際に、清和文楽館を訪問し、清和文楽にて「壺坂靈験記」を鑑賞させていただきました。鑑賞後、その演目に使われた人形と実際に触れ合うことが出来、人形の動きの仕組みを教えてもらうなど有意義な時間を過ごしました。文楽館から帰った後、参加者たちと実際に伝統芸能に触れて感じたことや、そこから見つけられる問題点とその解決策について意見交換を行いました。自分たちの文化に誇りを持っていない？ 素晴らしい文化に気付いていない？ 身近にない...など意見がでました。では、解決策は？海外では、文化は身近なもので、自分自身のルーツを語るうえでとても重要なものという意見がありました。もっと、私たちは自国の文化について興味、関心を持たなければいけない。では、どのようにすれば？ 自国、地域を知ること、愛する心、愛着を育てていくこと、それが、興味・関心を生み、伝統を継承していくことにつながるのでは... 残念ながら、時間が足りず、具体的な解決策を見出すことはできませんでした。ただ、話し合いの中にはいろんなヒントがあり、参加者それぞれがこれから考えていってもらえたらと思いました。

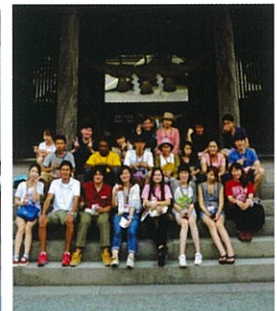


本分科会では、様々な価値観を持つ人々が、互いに否定せずに認め合えるようになることを目的としました。

初日、参加者たちには各1台ずつのカメラが手渡され、写真家の長野良市氏の指導のもと、阿蘇火口と阿蘇神社周辺を散策し、写真撮影を行いました。被写体は自由、「全景的な写真よりクローズアップ、子どもの目線など普通ではないアングルからの写真が面白い！」とアドバイスをいただき、それぞれに工夫を凝らし、カメラマンになったように撮影を楽しみました。撮影後、宿泊所に戻り、講師である日本国際交流協会九州支部長の樋口久美子氏の指導のもと、自分の顔や体形に似ている動物や、性格を絵（マーク）で表し、自己紹介を行うという自己表現のワークショップを行いました。いつも口頭で行う自己紹介とは違い、もっと自分自身を掘り下げて紹介することが出来ました。

その翌日は、前日に参加者たちが撮影した写真から自分のベストショットを選び、それについてのプレゼンテーションを行いました。講師の長野氏より、それぞれの作品に対してプロの写真家としての講評をしてもらいました。長野氏は全ての作品に対し、それぞれの撮影の意図を尊重し、写真のよい部分を強調し、さらにより写真となるにはという全体的に肯定的なコメントをされました。参加者たちは自分の写真に自信を持ちとても喜んでいました。

その後のディスカッションでは、この活動の成果がさっそく出ました。参加者たちが否定的な言葉を一切使わずに意見を述べたり、相手の言動を誉めたり、また、日本人参加者も自然と英語を使ってディスカッションしていたことは、一体感が生まれ、グローバルな交流の場になったと感じうれしく思いました。本当にやっ



講師、協力者からのメッセージ！

●「阿蘇の観光大使になったら何をするか」というテーマとその実施プロセスは、画期的で素晴らしいと思いました。私自身も、学生たちの新しくて斬新な発想を見ることが出来、勉強になりました。色々な国の大学生たちが、共に過ごし、一緒に考え学んでいくプログラムは、未来につながる良い取り組みだと思います。（第1分科会：阿蘇ジオパーク推進協議会 徳永 美紀 様）

●本キャンプは、日本人だけでなく、留学生や海外の大学生たちも参加している中で、自分の話す言葉や意味を理解してもらえるように説明する難しさと、醍醐味を味わうことが出来ました。私の想いがどれだけ伝わったのか不安な面もありましたが、「食は体だけでなく心も作る。知っているだけでは不十分、その知識を実践に移すことが大事である」といった回答が学生から返ってきた事に、大きな喜びを頂きました。（第3分科会 日本リモナイト 山本 剛宏 様）

●「カメラを通しての国際理解」は、カメラを通して見る視点が国によって、こんなにも違うものかということを感じることが出来ました。それぞれの作品を褒め合ったり、感動したり、違いを受け入れたりなど、これこそが国際理解の原点だと感じました。「褒めるワーク」を行った後では、褒める大事さが伝わったためなのか、参加者の表情から真剣になったことを感じました。（第5分科会 日本国際交流協会九州支部長 樋口 久美子 様）

●「人は、過去、現在、未来の中に生きている。あなたは、過去から現在を見つめているのだろうか、それとも現在から未来を見つめているのだろうか。過去の自分を問い直し、いまの自分の生き方を軌道修正するのもいい。いまの自分を見つめ未来の目標を定めるのもいい。しかし、時には未来の自分の姿を心のキャンバスに自由に描き、いまを生きることも大切だ。」

「ボランティアは、自由な意思に委ねられている。だから、未来の夢や理想を思い描きながら行動することだって出来るのだ。」（昭和女子大学コミュニティサービスラーニングセンター長 興梠 寛 様）

3泊4日の本キャンプに参加していただきました日本や海外の大学生の皆さん、本当にありがとうございました。私たちは開催日の約半年前にあたる3月から実行委員会を立ち上げ、準備を行ってきました。

今回が初めての取り組みであったこともあり、うまくいかないこともありましたが、皆様のご協力のお陰で、このように素晴らしい形で終わることが出来ました。本当にありがとうございました。

私たち実行委員会が、当初から大切にしたいと考えていたことは「であい」でした。それは偶然の出会いかもしれませんが、それぞれが必要としあい、助け合う「絆」「結」へ発展する「であい」でなければなりません。この「であい」だけは、皆様のおかげでしっかりと達成することができたと思います。

さらに、各分科会の活動において、異文化の壁を乗り越え、一体となって「今できること」を考え、活発な意見交換ができたことは素晴らしい成果といえるでしょう。今後も、このグローバルワークキャンプが開催され、私たちと同じようにもっと多くの大学生が貴重な体験と「であい」を通して、グローバルな視野をもった人間に成長していってほしいと思います。そして、参加者全員が「キャンプに参加して良かった」と10年後も20年後も言って欲しいというのが私たち実行委員会の切なる願いです。

まず、来年は、今回の反省を活かし、よりパワーアップしたキャンプを実施しますので、是非、参加してください。皆様と来年も「阿蘇」でお会いできることを楽しみにしています！

最後になりましたが、このキャンプに関わっていただきました協力者や協力団体、企画推進員、そして実行委員としてこのような貴重な経験の機会を与えてくださった熊本市国際交流振興事業団の皆様には心から感謝申し上げます。



実行委員募集！！

第2回グローバルワークキャンプの実行委員になってくれる人を募集します！！！！

会議は月に1度、熊本市もしくは阿蘇で行うこととなります。会議の他にfacebookを使用し、資料の共有を行う予定です。遠方の方でもSkype会議で参加することができます！もちろん、熊本市内の方、大歓迎です★

チャレンジしてみると、見える世界が変わるかもしれません！私たちと一緒に1歩踏み出してみませんか！！

興味のある方。「我こそは、実行委員だ！」という方。是非、下記のアドレスに連絡をください。

お待ちしております！

E-mail pj-info@kumamoto-if.or.jp

ちゅうも〜く！！

みなさん、ご存知でしょうか？

私たち実行委員会がコソコソ運営しているfacebookページが存在することを！

なかなか「いいね！」が増えないことが悩みなのです…。この文を読んでいる心や優しきあなた！このページにアクセスして、「いいね！」をポチッと押してください。そして、私たち実行委員会の活動を温かく見守ってください！

よろしくお祈いします★

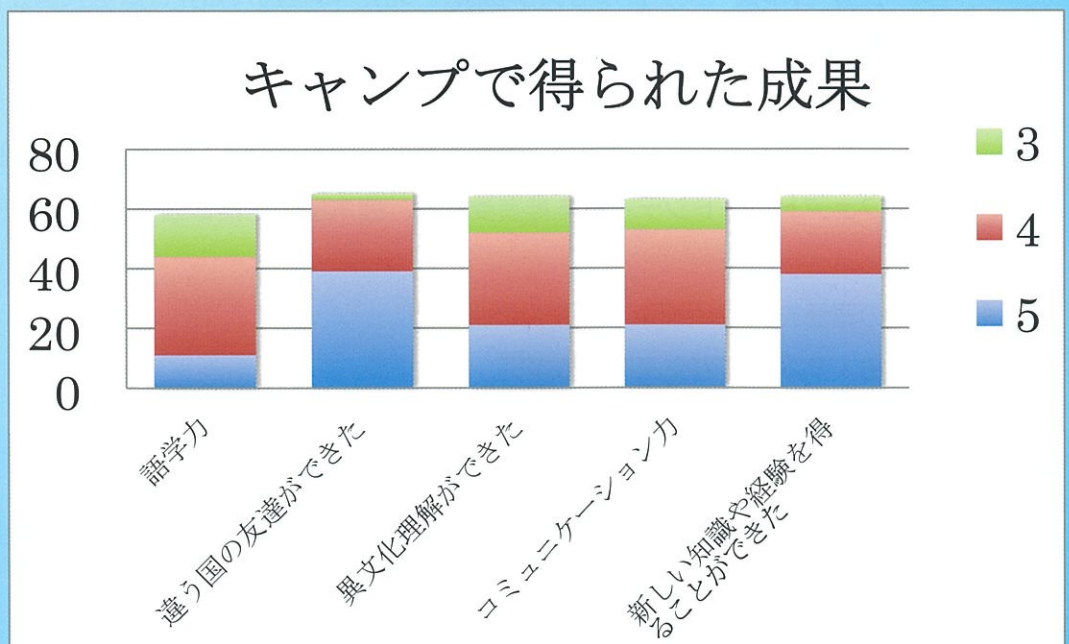
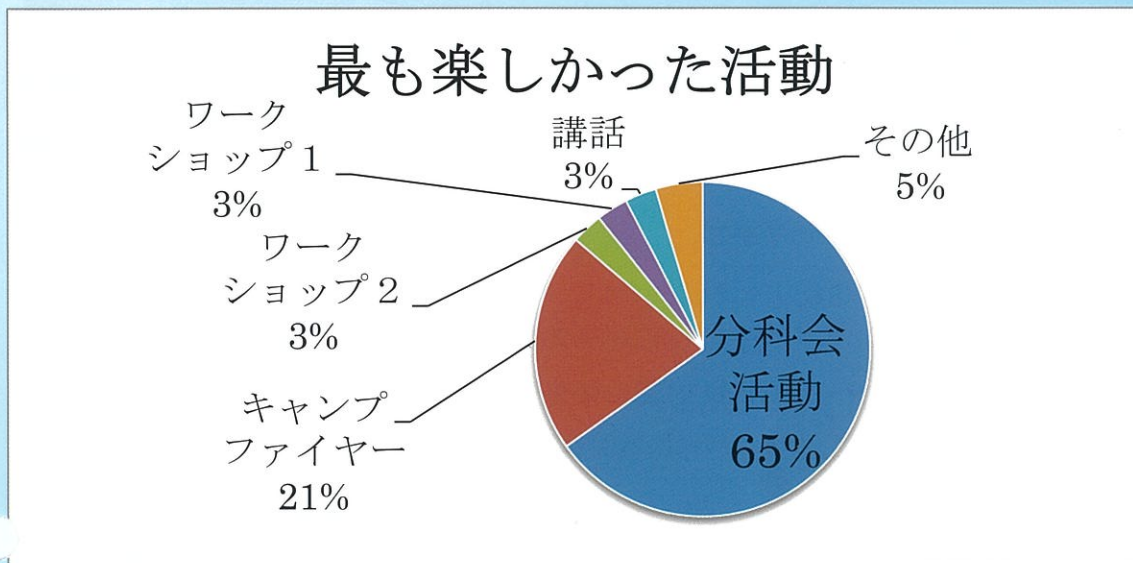
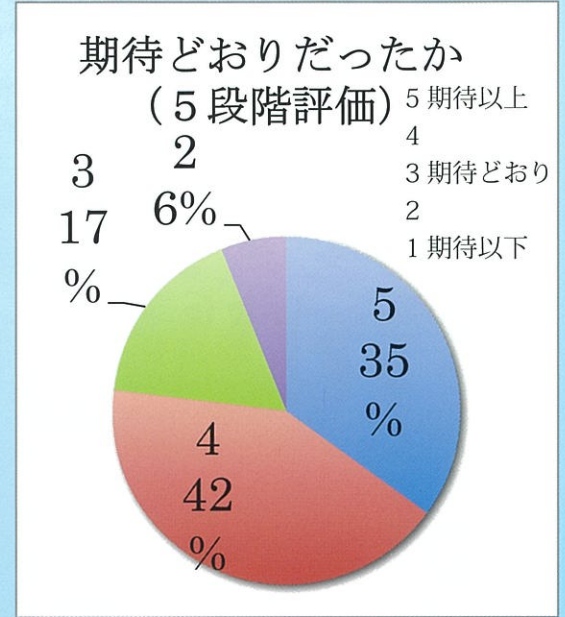
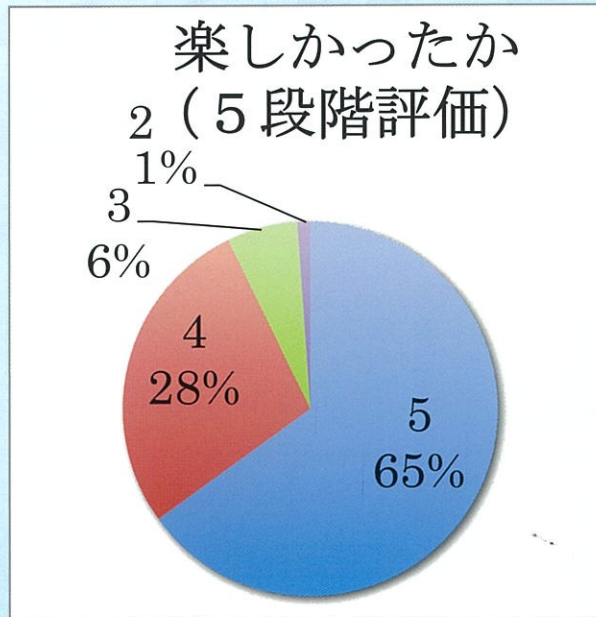
<https://ja-jp.facebook.com/globalworkcamp.aso>



アンケート

報告者：内尾晶子さん（九州大学2年）

とても楽しかった 5
4
楽しかった 3
2
楽しくなかった 1



第1回グローバルワークキャンプ in ASO



実行委員メンバー

内尾 晶子（九州大学 ＊実行委員長）
野口 一馬（熊本県立大学）
野呂 一葉（熊本県立大学）
宮原 薫（熊本学園大学）
黨 翠（熊本大学）
大和 賢佑（熊本大学）
三藤 紫乃（筑波大学）
宇都 真太郎（日本文理大学）
奥本 達彦（日本文理大学）
櫻田 聖人（日本文理大学）
佐々木 彰子（立命館アジア太平洋大学）



主催団体：一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

企画推進員（順不同）

須藤美代氏（熊本県文化課）、大野章子氏（JICA デスク熊本）、橋村隆介氏（崇城大学准教授）
金賢廷氏（韓日社会文化フォーラム代表）、樋口久美子氏（日本国際交流協会九州支部長）
平部至誠氏（独立行政法人国立青少年教育振興機構）、

協力者（順不同）

徳永 美紀氏（阿蘇ジオパーク推進協議会、辻 誠氏（株式会社リモナイト）、
長野 良市氏（長野良市写真事務所）、北見 靖直氏（独立行政法人国立青少年教育振興機構）
桑島 元博氏（阿蘇一の宮門前町会長）、山本剛宏氏（農業生産法人阿蘇デザインファーム）

協力団体（順不同）

阿蘇ジオパーク推進協議会、農業生産法人阿蘇デザインファーム、清和文楽館
フェアトレードシティ熊本推進委員会、熊本留学生推進会議、立命館アジア太平洋大学

【主催団体の連絡先】

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

〒860-0806 熊本市中央区花畑町 4-18（熊本市国際交流会館）

TEL：096-359-2121 FAX：096-359-5783

E-MAIL：pj-info@kumamoto-if.or.jp URL <http://www.kumamoto-if.or.jp/>